

令和4年度 第56回 中学生の「税についての作文」
まちだ納税貯蓄組合連合会優秀賞

「私たちが今できること」

町田市立薬師中学校 3学年 滝本 紗耶

二〇一九年の冬、日本でコロナウイルスが流行しはじめた。その影響で、突然の一斉休校となり、私たち学生の青春は一瞬にして奪われていった。当時小学六年生だった私は残り数十日しかない小学校生活が急に無くなってしまった悲しさと卒業式はどうなるのかと不安を抱えていたのを今でも覚えている。

休校期間中は、どの番組をつけてもコロナに関するニュースばかりだった。その中で不安を抱えながらも患者さんの治療を行う医療従事者の方や政府からの要請に従い店を閉めている人など沢山の人が協力しているというニュースがあった。私はそのニュースを見た時、我慢しているのは自分だけではなく、皆が誰かのために我慢して協力しているということに気がついた。四月頃には一人につき十万円の給付金が政府から支給されたり最前線となってコロナと戦っている医療従事者の方にはその他にも「新型コロナウイルス感染症対応従事者慰労金交付事業」という仕組みによりお金が支給されている。その他にも「アベノマスク」等これらは税金があったからこそ実現したことだった。もし、この給付金がなかったら、少しずつ戻ってきている今のにぎやかな日本は無かっただろう。どんなに辛くても、苦しくても、悲しくても日本には納税する義務がある。「納税は多額だただお金をとられるだけでは…？」と昔の私は、考えていた。しかし、今の私の考え方は違う。「納税をするということは、私たちがもし何か困った時に助けてくれるのはもちろん、日常生活のどこかで誰かのために役立っている。」と考えるようになった。

「持続可能な社会へと」この言葉を最近ニュース等で耳にすることが多いがこれは税金も関わると思う。今、未成年の私たちができることは、義務教育で沢山社会について学び、今送れている日常や周りの人に感謝を忘れないでいくことだと思う。コロナが始まって三年が経った今でも学校生活や行事には制限がつきもので悔しい思いも沢山してきた。私たち中学三年生は、今の中学校に入学してから本来の中学校の行事を知らない。自分たちも体験したことがないので後輩たちに引き継ぐこともできなかった。しかし、生活様式の変化があったからこそ工夫して様々な困難を乗り越えたからこそ身についたことも沢山あったと思う。正直、このまま卒業を迎えるのは寂しいが、残りの短い中学校生活を何事もなく全員が笑顔で最後は「楽しかった。」そう思える素敵な学校生活を送りたい。